

女子美

No.158/2007



2P 漫画家、岩岡ヒサエさん&鈴蘭カリオさん
6P 「ジョンビの無形文化遺産プロジェクト」を実施
8P 大村曾 理事長がハマオ・ウメザツ記念賞を受賞
9P 梨園家 戸田屋商店創業135周年記念
10P やなぎみわ氏特別講演会
14P ジュディ・シカゴ氏講演会報告
17P スポーツフェスタ開催
18P オープンキャンパス2007
19P 「スリランカの像」デザインコンテスト
20P 林規章准教授、One Show Design Gold受賞
21P 女子美アートミュージアム展覧会情報
22P 公募展受賞者紹介、シリーズ 女子美探訪

Interview ● ● ● OGインタビュー —漫画家 岩岡ヒサエさん&鈴菌カリオさん

98年度に絵画学科洋画専攻を卒業した岩岡ヒサエさん、03年度にデザイン学科環境計画専攻を卒業の鈴菌カリオさんのおふたりは、女子美卒の若手漫画家として活躍、現在同じ雑誌でも連載されています。社会人生活を通して漫画家へと進んだ岩岡さん、在学中に持ち込んだ作品からデビューへとつながった鈴菌さん。作風も漫画家までへの道のりもまったく違いながら、学生時代に漫画好きを隠していたことは共通だとか。またおふたりとも漫画家に大切なのは社会人としてのきちんとした仕事ぶりだとおっしゃいます。それぞれの夢を実現されている岩岡さんと鈴菌さんに、デビュー前から現在の漫画家生活までのお話を伺いました。

岩岡ヒサエさんにきく。



©岩岡ヒサエ/小学館・月刊KKI



学生時代、漫画を好きなことはひた隠しでした

—女子美に入学したきっかけは何ですか？

小学生の卒業文集でもう漫画家になりたいと書いて、中学では陸上部の部活後にドロドロになりながら漫画を描いていました。当時は模写ばかりで、最初はオバQとドラえもんのパクリのようなキャラクターをサザエさんの日常的ストーリーで描いたり、もっと後にはドラゴンボールとかをオタクっぽく(笑)。毎日4コマ漫画を「自分で連載」みたいに描いていました。中学卒業の頃にそんなに好きならば美大に行けばといわれて意識し始めて。高校では美術部でしたがそこではデッサンや油絵で、漫画は家でだけです。あまり漫画が好きの子



「土星マンション」1巻より ©岩岡ヒサエ/小学館・月刊KKI

が同学年にいなかった。漫画好きということは一言も言わずにひた隠しでした。

—大学時代にさらに漫画好きに？

それが、大学に入ってから音楽部(合唱)に超のめり込んでしまって。合唱、合唱、合間に課題、の「忙しすぎる部活人生!」でした。投稿したい、漫画を真剣にやりたいと思いプロと自分の作品を見比べたら、とんでもなくヘタクソだと思って。諦めて全然違うことをしようと音楽部に入ったんです。人と漫画好きの気持ちを共有するのも諦めていました。普通に漫画好きといわれる人とも好みがちよっと違ってあまり馴染めず、一人で同人誌を作ったり。漫画に関しては一人でオタクっぽく、本当に趣味的にやっていたですね。女子美卒で同じ小学館の『KKI』という雑誌で連載している鈴菌カリオさんとは、周りに漫画好きを隠していた部分が似ていて、漫画の濃い話もできて(笑)、共通する部分がありますね。

—女子美の女性ばかりという環境が作品に与えている影響はありますか？

もともと女子高育ちでしたし音楽部で他大学とも交流があり、「合唱を熱く語る古き良き男たち」がいたりして女性だけの環境だとはあまり意識しませんでした。それよりも絵画科に入っておきながら、美術の道に進むのとはちょっと違うかなというのをずっと感じていたかも。それでも油絵では当時、顔をテーマに色と色をつないで自分の形にならないかなと試行錯誤して、最後

は抽象に近い絵を描いていました。

絵画の時は新しいことをしなくちゃ、とか、考えて描かなくちゃ、とすごく思っていたんですが、漫画になったらもっと素直に描ければいいと思うようになりました。今も漫画でひねくれた顔を書いているんですけど(笑)。油絵の具って一番きれいな色が出せる絵の具だなと思うし、またやってみたいとは思っています。

—ご自身のHPでは漫画の他にイラストやぬいぐるみも発表していっぱいしますね。

趣味で彫塑や立体、展開図を作るのも好きで、凝った時期があるんです。小さいものから身長大まで、描いたキャラクターを立体にして「どうしたらこのクマがもっと可愛くなるだろう?」とか考えて、職人っぽくメラメラと燃えたりするのが好きなんです。

—会社が終わったら漫画、の寝不足の日々

—卒業後、3Dのお仕事をされていたとか？

プロになりたいと思ってちょっと描いては諦めるということを繰り返して、結局ゲーム関連の会社に就職しました。ちょうど3Dが登場したことで、ゲームでは絵画のデッサン力のある人や、立体を描ける人が重視されたんですね。最初は3Dでの人物作りと漫画のキャラクター作りは近いかなと思ったんですが、実際には3Dは彫塑の方に近かった。すると中学の頃と同じように、会社が終わってから漫画を描く寝不足

Interview

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

の日々が、また始まったんです。10時出版社で夜12時頃まで仕事をしてから漫画を描いたので、毎日すごいサイクルで。昼休みに誰にも見つからないよう一番早く出て、遠くのファーストフードで漫画を描いたり。好きすぎて止められないのであって、全然辛くはなかったですね。



—プロへと進んだきっかけは？

投稿して一度、賞に引っかかってから意識し始めました。でも編集の方には「仕事は辞めないほうが良い」と。食べていける保証もないので心配して言ってくれたのだと思うのですが辞めることにしました。で、編集の方に「辞めました」って言ったら、「じゃあ、頑張りなさい」と(笑)。一度、掲載されてからが長かったです。デビューした後も投稿が必要な時期が2年くらい続いて。ただその間も自分の同人誌という発表の場があったので心の支えとなりました。雑誌デビュー後にその同人誌が書籍になったのがラッキーでしたね。同人誌でなければ描けないような暗めの話が多かったり、スタイルも1ページに2コマだけのものなどを描いていたので、アートっぽい不思議なジャンルとして出版してもらいやすかったのかもしれない。

何回も受け、何回も蹴落とされ(笑)

—持ち込む雑誌は決めていたんですか？

自分の作風に合いそうなところや、描きたい雑誌、友達からも薦められたり。今も青年誌系が多いんですが最初は『アフタヌーン』でした。わりとまろやかなものしか描けなくて、恋愛は描くのが苦手なんです。女性系の雑誌だと恋愛ものは必ずないといけなかなと(笑)。投稿し始めの頃は、大島弓子さんや高野文子さんとか、女性も男性も読む作家に影響を受けたりしました。

絵画出身なのでプレゼンテーションは全然したことがなかったんですが、就職活動はしていたので、漫画家として持ち込みを始めた時には「ああ、一生続くんだ、就職活動」と思いましたね。持って行く出版社は大企業だったりもするので、そこも就活と似ていて社会人として自分がきちっとしていないといけなとか。就活と違うのは

何回も受けられるところなんですけど、何回も蹴落とされもします(笑)。

最初に見てもらう時には投稿が、実際に目の前で編集の人に見てもらうか2つパターンがあると思います。応募は直接会わずに結果だけがわかるから、気弱な人は最初それくらいがよいかもしれません。持ち込みだと結構厳しい意見も言われて「ガン」ときたり。最初は大体直されるんです。何回も直してもらって初めて「もう1回賞に応募を」と言われて。それでネームっていうんですが下描きの下書きを提出して、それから連載になるかも、という過程が多いと思います。

—漫画家って自分のペースで仕事ができると思われていますよね。

毎日の仕事の配分は自分のペースですが、その分、締め切りギリギリでも案が出てこなくて最後の追い込みでドロドロになることもあります。今は隔週で原稿が仕上がるペースで4つくらいを平行しています。ストーリーの大きな流れを担当さんとも相談してある程度作っておいて、あとは一話一話やっていく。部活の合間に課題をやっていたのと同じで計画性はないんです。昼寝もするし、決して威張れるものではありません(笑)。

漫画の中の人物の生き方に焦点をあてたい

—思い描いていた漫画家生活と大きく違う部分は？

同人誌から意識を変えるのには時間がかかりましたね。最初は直される時にめちゃくちゃ抵抗感がありました。なんでダメなんだろう？って。でも自分の作品を客観的

に見る練習でもありました。それで編集者さんの意見と戦ってもいいし、素直に聞いてもいいと思う。1度は全部言われるままにやってみて仕上がったものを見てみるというのも勉強になると思います。その後は独自でガーンと進める方もいると思うし、編集者とすごく練り上げる作家さんもいて、人によって違いますね。

あと、もうちょっと華やかな世界かなと思っていましたが、想像以上に過酷でしたね。家での作業なのでだんだん自分が薄汚れていくし(笑)。たまに忘年会とか華やかな場があって会場は大きいし、すごく有名な作家さんとか憧れの作家さんがいて、その時ばかりはテンションが上がるんですけど、帰って来てその薄汚い部屋にまた戻る、という…(笑)。

—今描いている作品で最も力を入れているところはどこですか？

『KKI』に連載中の『土星マンション』という漫画は主人公がけっこうフワフワしているんですが、自分をしっかり持って自分のいるべきところを見つけ、最後に彼が自分でちゃんと立ってしっかり生きていってくれればいいなと。ただ「楽しくあれ」という感じで描くものもあるんですけど、アイデンティティみたいなテーマを描くことが多いですね。自分の悩みが多いのかしら？(笑)。このストーリー作りのために社会と差別の問題について本を読んだりもしましたが、漫画の中にいる人物、その人たちがどう生きるかに焦点をあてたいなと思っています。

—女子美の後輩、特に漫画家を目指したい人にメッセージはありますか？



『土星マンション』1巻より ©岩岡ヒサエ/小学館・月刊KKI

体力、気力、根性でしょうか(笑)。実際に行動するまでにみんな時間がかかると思うんですが、まずは行動しないと始まらない。けっこう自分で自分にダメ出ししちゃったり、引っ込み思案な人もいると思うけれど、「漫画は見てもらう仕事なんだ」というのを意識して堅い意志を持てば、デビューにもつながると思います。編集者さんに見せるのも慣れるまでにすごく時間がかかるし、私も今でも緊張します。そこは「頑張り」ってそっと自分の背中を押すような感じで。後輩が増えるとライバルが増えるということでもあるかもしれませんが、先につぶれる気満々ですから(笑)、ぜひ一歩踏み出してほしいですね。



ラクターで描いていましたね。絵を描きたくて美大を受験しましたが、入学するまで美大のことをよくわかっていませんでした。それで、絵が描きたい人は、どちらかという絵画学科なんですよ(笑)。デザイン学科に入ってから、絵を描く学科じゃないことに衝撃を受けました。

岩岡ヒサエ プロフィール

1999年、女子美術大学絵画科洋画専攻(現絵画学科洋画専攻)卒。

2002年、講談社アフタヌーンより『ゆめの底』でデビュー。現在、小学館『KKI』で連載中の『土星マンション』では、地球全体が自然保護区域となり、人間が上中下の層からなる上空の巨大リングシステムで暮らす時代を描くSF長編。中学卒業と同時に亡き父と同じ職業「リングシステムの窓を拭く仕事」に就いた主人公ミツの成長を追う。このほか、少年画報社『月刊ヤングキング』で「ねこみち」など連載中。平成17年度、18年度連続で「文化庁メディア芸術祭」の審査員推薦作品(「しろいくも」、「ゆめの底」)。

<公式サイト>

<http://moinmoin.fc2web.com/framepage1.htm>

鈴菌カリオさんにきく。



©鈴菌カリオ/小学館・月刊KKI

美大にはもっとオタクがいると思っていた(笑)

一漫画家を目指したのはいつ頃ですか？

小さい頃からです。小学校の時から自分にはそれしかないと思っていて、漫画家にならなかつたら生きていても意味がないというぐらい。けれど中学・高校の頃は、漫画を描いていることをなるべく周囲に隠していました。運動部に入っていて、部活から帰ったらひたすら部屋にこもって、朝の4時ぐらいまで漫画を描くという毎日。創作漫画ではなく、すでにある漫画のキャラ

一女子美に入り、どうでしたか？

美大はもっとオタクがいるのかと思ったら、全然いなかった(笑)。もっと漫画好きを共有できるかなと思ったら、仲良くなった友達が漫画に興味がない子たちばかりでした。「え、美大に来る子って、みんなオタクじゃなかったんだ」ってそこでまたショックを受けて。デザイン学科の友達はみんなアートでお洒落な感じだったので、その影響で現代アートの「意味の分からない感じ」に憧れた時期もありました。でも実際に、現代アートの作家の名前が友達の口から出ても、「誰!？」っていう状態で、デザイナーやアートディレクターも知らず、映画にも西洋美術にも興味がなくて、ただただ漫画が好きだったという…。

かといって漫画のサークルに入ったりもしていませんでした。そういうサークルに入る人と自分は違う、みたいな恥ずかしい選民意識みたいなものがあり、アートワールドへの憧れがあったと思う。その憧れの延長が『乙女ウィルス』を連載していた雑誌『KKI』につながったかもしれません。アートっぽい、前衛的な漫画が載っている雑誌という印象だったので。

一漫画家になるために行動を起こしたのはいつですか？

大学在学中にデビューする!と心で思っただけなんですけど、実際には何もしていませんでした。人に見せるための漫画を描いていなかった。でも4年になって周りが就職活動を始めてザワザワし出して、やっと焦りました。でも「漫画家になりたいから就活しない」なんて、親に言えない。何も説得できる材料がないので、とにかくまずは漫画を描こうと。それまではノートに鉛筆で描いていただけだったんですが、その

時に初めてちゃんと原稿用紙にペンとインクで描いたんです。4年の中頃に完成させ、初めて出版社に持ち込みました。焦っていたので、投稿なんかしてられない!と思ったんです。卒業制作と同時進行で漫画を描いていたというよりも、卒業制作の方をないがしろにしました…(笑)。

「オタクでアニメっぽい絵が好き」と踏ん切りがついて

今まで友達にも見せたことがなかったのに出版社に持ち込んで。生まれて初めて他人に漫画を見せた時には、死ぬほど恥ずかしかったです。その時の編集者の反応が全然駄目、という印象で落ち込んでいたんですが、後に賞の最終候補として雑誌に名前が載ったんです。でもその後、面倒臭くて後が続かなくて…。面倒臭いんですよ、漫画を描くのって。何かを作って完成させるって、どんなに好きなものでも面倒臭いことだと思います。すると編集の方から「もう描かないんですか?」という電話があり、やっと2作目を描いたんです。前回、反応が良くなかったという思いがあったので、作風をガラッと変えました。1作目は「絵本みたいな漫画を」というコンセプトの絵が描きたいだけの漫画だったから、一コマ一コマに画力を注ぎ込みすぎていて。その辺が美大に入ってアートにかぶれた結果で、「だったら絵本を描けよ」という話ですよ(笑)。なので2作目は思い切り漫画らしい漫画を描いてを持っていきました。そうしたら賞に入ってデビューになったんです。端から見たら、描いたものが全部賞に入ってデビューできて雑誌に載ると、かなりトントンな印象だと思います。



『乙女ウィルス』2巻より ©鈴菌カリオ/小学館・月刊KKI

Interview

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

—今、描くときに大事にしていることは？

今では思い切り漫画らしい漫画を描きたいと思っています。原点回帰ですね。「オタクで、アニメっぽい絵が好き」という自分に踏ん切りがついて、オタクならオタクらしくしようと思ったんです。あえてオタクっぽさを狙ってやっているように思われますが、私はストレートで素直なオタクです。ちょっとひねくれて見えるのは、1回アートの世界に突っ込んだせいかもしれないですね。お洒落に見られたいという…。その頃は格好つけたくてアर्टでアングラなお洒落な雑誌に載りたかった。『IKKI』は創刊されたばかりで雑誌のカラーもまだ決まっていませんでした。今も『IKKI』には全体的に複雑で真面目な漫画が多いので、その中で私に必要とされているのは、頭を使わなくても読める単純でバカな漫画だと思っています。連載した『乙女ウィルス』も、ギャグ要素の強い、エンタテインメント性を重視した漫画なのですが、もっとたくさんギャグ漫画が載っている雑誌だったら自分はこんなに重宝されなかったらと思ういます(笑)。

漫画家も社会人、「普通の部分」が大切

—漫画家は、美大出身の人が多いのですか？

『IKKI』で連載している人は、美大卒が多いですね。よく「漫画家になりたいんですけど、美大に行った方がいいんですか」という質問をされるんですが、これはもう個人の問題ですよ。美大に行っても描かない人は描かないし、美大以外でも描く人は描くし、どこへ行ってもやる人はやる、ということだと思います。

—漫画家になって改めて感じたことは？

漫画家という職業には、コミュニケーション能力が重要だと思います。例えば人と接するのが苦手で、一人で絵を描いているというイメージを持って、漫画家を志している人もいるかもしれない。でも漫画は一人でもっていても作れないし、成り立たない。編集者や自分の担当者、アシスタントなどと話し合いながら、作っていかなくちゃならない。学生の頃は自分が繊細で人見知りだと思っていたんですが(笑)、いざデビューして社会に出てみたら、意外と図太かった。プロになり、人見知りは治すものだとも思いました。漫画家は一見特殊な職業に見えるので奇抜な人が多いように思われますが、みんな普通の社会人です。プロとして働くには、社会性が重要なのだ

と改めて思います。私もギャグ漫画を描きつつ、普段の生活では「普通」であることを大切にしています。

とにかく漫画が好き!の一点です

—作品を描く情熱や、描き続ける意志はどうすれば持続できるのでしょうか？

「締め切り」でしょうか。締め切りがなかったら、みんな全然描かなくなると思いますが(笑)。締め切りっていう、社会人として守らなければいけないものがあるから描くというのが、たぶんかなり大きい。自分の作品に大満足の「完成」なんてあり得ないので、締め切りまでにどの程度の完成度で出すかの妥協点を決めないとならない。だから完璧主義の人は漫画家に向いていないかも。「これは自分の本当の全開じゃない。もっと描ける」と思って描きあがらないとか、途中でつまらないと思って完成させることができずに止めちゃう。でも、締め切りがある場合は、描き上げなきゃいけないんですよ。「あ、これ、駄目かも」と思っても、いざ出してみたら好きだと言ってくれる人もいるし。だから締め切りというのは「偉大」です。

それから内から沸き上がるものなんて毎月定期的に出てこなくて(笑)、絞り出しています。私の作品は伝えたいテーマや社会へのメッセージがあるわけではなく、エンタテインメントなので、ただ読んで面白いって思ってもらえたら嬉しいです。可愛い女の子を描きたい!などの小さな情熱はありますが…。具体的な大きなモチベーションっていうのは難しいですよ。人を



右から、ネーム・下描き・ペン入れ



下描きの前に作成するネーム(絵コンテ)で実際の漫画のコマ割り、セリフ、構図などが決まる。

楽しませることが好きというサービス精神と、「とにかく漫画が大好き!」という想いで日々、描いています。

鈴菌カリオ プロフィール

2004年、女子美術大学芸術学部デザイン科環境計画専攻(現デザイン学科)卒。
2004年、出版社に持ち込んだ『知恵熱』が小学館『IKKI』新人賞・イクマンを受賞しデビュー。
2005年~2007年まで同誌で連載中であった、乙女の欲望や野望などをジャンルレス&ボーダーレス&ノールールに描いた読みきり短編『乙女ウィルス』の第3巻が11月末頃発売予定。現在新連載準備中。
<公式サイト>
<http://members.jcom.home.ne.jp/chienetu/>



『乙女ウィルス』1巻より ©鈴菌カリオ/小学館・月刊IKKI

Report ● ① 「ジョシビの無形文化遺産プロジェクト」を実施



本学は財団法人ユネスコ・アジア文化センター（以下、ACCU）との共催で、無形文化遺産についての認識や2003年にユネスコで採択された「無形文化遺産の保護に関する条約」（以下、無形遺産条約）を広く一般に知らせていくためのプロジェクトを実施しました。「無形文化遺産の保護に関する条約のプロモーション及び美術大学生による同条約広報コンテンツ制作ワークショップ」と名づけられたこのプロジェクトは、美大生のアートとデザインの力で無形文化遺産の概念や保護の必要性を広く普及させる、というたいへんユニークな国際社会貢献活動です。ACCU国際教育交流事業／専門家招聘プロジェクトとして位置付けられ、財団法人ポーラ美術振興財団及び国際交流基金の助成対象事業です。また、シーエルディー株式会社から会場音響機材の全面的なサポートを受けました。

プロジェクトには2つの目的があります。第一に、本学と外国の美術大学の学生が一つの課題を共有して作品制作ワークショップに参画することで、若者の国際的ネット

ワークを構築し、事業成果の世界的波及を生み出すことを目的とします。第二に、社会における無形文化遺産に関する広範な理解を促進することを目的とした、メディアの素案作りを行い、将来的にまだ無形文化遺産の概念の定着していない地域のためにACCU等で活用されることを目指します。

プロジェクトは2つの活動で構成されました。第一に、本学学生91名と学術交流協定大学4校（中国の広州美術学院、イギリスのセントラル・イングランド大学パーミンガム / パーミンガム・アート・デザイン学院、フィンランドのエプテク応用科学大学アート・デザイン学院、オーストラリアのグリフィス大学クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート）の学生8名が27の制作グループを編成し、無形文化遺産や無形遺産条約をわかりやすく広報するプロモーション・ビデオ、アニメーション、パンフレット、ポスター、絵本等を制作しました。学術交流協定大学の学生は2007年7月2日～同6日の作品完成期間に来日して、本学の学生と同じスペースで作品を完成させました。7月5日には学生による作品プレゼンテーションが行われ、多様なメディアを活用した作品はどれも完成度が高いものでした。優秀作品はACCUによる世界レベルの広報・教育活動に利用される予定です。

第二に、この作品完成期間に著名人による講演、シンポジウム、対談、無形文化遺

産相当事象の実演を開催し、大学生をはじめとする一般聴衆に広くアウトリーチしました。無形文化遺産および無形遺産条約にかかわる研究者を海外（ニュージーランド、インド、オーストラリア、インドネシア）から4名、国内から3名、また無形文化遺産の継承活動に従事する関係者6名を国内から招聘し、無形遺産条約が遺産保護継承に果たす役割を検証し、あわせて遺産保護継承活動の現場からの声をどのようにすれば取り込むことが可能か、その方策を探りました。6回にわたった講演では、工芸技術の伝承の重要性、映像として無形文化遺産の記録を残すことの意義、染色技術を通じた生活の営みと伝承技術の関わり、伝統舞踏の伝承と保護活動との関連、ニュージーランドのマオリ文化が教育によって復活しつつある状況等が報告され、実に広範な分野で遺産保護継承が緊急の課題として残されているかが提起されました。シンポジウムでは、伝承文化と生活、保護活動と観光、文化的創造と伝承、著作権と文化の継承などの問題点を浮彫りにさせながら、無形文化遺産の保護の重要性を訴えるものになりました。このほか、南インドの古典舞踊劇「クティヤットム」、奄美島唄、八重山古典民謡・琉球民謡、インドネシアの伝統工芸技術「バティック」の実演は、伝承文化とは何かを具体的に提示する機会となりました。（国際センター）

7/2

〔基調講演〕



河野俊行氏(左上)
(九州大学法学研究院国際関係学部門教授)

ラウリ・ヒンドル氏(右)
(ビクトリア大学ウェリントン校教育学部専任講師、ニュージーランド)



大貫美佐子(左下)
(ACCU文化協力課長)

〔実演〕

「南インドの古典舞踊劇 クティヤットム」



ゴパール・ベヌ氏
(ナターナ・カイラリ〈伝統芸術研究研修センター〉所長、クティヤットム演出家、インド)

〔専門家ミーティング〕



専門家がそれぞれの立場から無形文化遺産保護について述べる。学生は聴講することができ、課題作品制作の留意点なども聞く。河野氏、大貫氏、ヒンドル氏、ベヌ氏のほか、ヘンドリ・スプラウト氏、関本照夫氏(東京大学東洋文化研究所長)、本学の瀧本英男教授、羽太謙一教授が参加。

7/3

【対談】
「南インドの古典舞踊劇クティヤットムをめぐって」



グローバル・ベヌ氏
(ナターナ・カイラリ(伝統芸術研究研修センター)所長、クティヤットム演出家、インド)



河邑厚徳氏
(NHKエデュケーショナル・エグゼクティブプロデューサー)

【実演】
「奄美島唄」



坪山豊氏
(奄美島唄唄者)

7/4

【学生ワークショップ】
「無形文化遺産プロモーションコンテンツ制作」



使用媒体はビデオ動画、アニメーション、ポスター、リーフレットなどを自由選択。

【講演】
「無形文化遺産と言語・法」



フェルナンド・ド・ヴァレンヌ氏
(マドック大学法学部准教授、オーストラリア)

【実演】
「八重山古典民謡・琉球民謡」



親盛隆司氏(左より2番目)
(八重山古典民謡音楽研究会教師、琉球民謡保存会師範)
宮良公子氏(右より2番目)
(琉球民謡保存会師範)

7/5

【講演】
「無形文化遺産の特性とその保存が提起する問題」



川田順造氏
(神奈川県日本常民文化研究所客員研究員)
(学生作品プレゼンテーション)

【講演】
「無形文化遺産と映像をめぐって」



姫田忠義氏
(民族文化映像研究所所長)
(学生作品)

【実演】
「インドネシアの伝統工芸・パティック」



ヘンドリ・スプラプト氏
(インドネシア通商産業省パティック及び手芸工芸研究・開発機関研究員、インドネシア)



ワークショップ参加学生が発表し、専門家からの質疑に応答する。



その他に7/4に坪山豊氏と梁川英俊氏(鹿児島大学法文学部教授)による【対談】「奄美の無形文化遺産をめぐって」を実施、7/5に川田順造氏、姫田忠義氏、本学の原聖教授による【鼎談】「無形文化遺産と映像をめぐって」(民族文化映像研究所制作映画「山に生きるまつり」(28分)上映を含む)を実施。

NEWS ● ① 大村智 理事長がハマオ・ウメザワ記念賞を受賞



大村智 理事長が、化学療法の発展に寄与した研究者に贈る「ハマオ・ウメザワ記念賞」を受賞しました。同賞は、1979年に国際化学療法学会の最高の賞として設立され、赤痢などの治療に有効な抗生物質を発見した偉業で知られる故梅沢浜夫博士の

名を冠した賞であり、日本人の名を冠した数少ない国際賞の一つです。授賞式は、今年4月にドイツ・ミュンヘンでの第25回国際化学療法学会総会において行われました。

この受賞を祝して5月27日に、日比谷の帝国ホテルを会場として記念講演会・祝賀会を開催し、著名な本学卒業生作家や同窓会関係者など、多数来場がありました。

記念講演会では、今回の受賞対象にもなった微生物由来の天然有機化合物“エバーメクチン”など数多くの医薬品の開発についての研究のほか、化学と美術、感性についての講演がなされました。それに続く祝賀会では、大村智理事長、佐野ぬい学長を囲み多くの方々との懇談がなされ、終始和やかな雰囲気の中閉会いたしました。



NEWS ● ② 杉並区とのデザインに係わる協定調印

5月28日、杉並区役所にて佐野ぬい学長と山田宏杉並区長との間で「女子美術大学と杉並区とのデザインに係る連携協働に関する協定」の調印式が行われました。本協定は2004年10月に締結された「杉並区と区内高等教育機関との連携協働に関する包括協定」に基づいたもので、美術・デザインの専門教育機関である本学と連携協働し、「すぎなみの輝き度向上」に取組む杉並区のデザイン力の向上を目的としたものです。初年度である2007年度は、区の重要な政策・施策に係る13件のポスターデザインをします。

本プロジェクトを進めるにあたり、教員5名によるプロジェクトチームを結成しました。このチームにおいてコンセプトを作成し、杉並区の特徴を活かし、統一感のあるポスターを制作していきます。制作には、授業課題やコンペなどで、学生の参加も予定しています。

芸術文化面での大学と自治体との包括的な協定は他にもありますが、本プロジェクトのような、デザインに特化した協定による連携は、全国でも類を見ません。これを通じて、さらに地域との連携を深め、芸術文化の発展に貢献すると同時に学内の教育

的効果にも寄与することを目指しています。
(研究所長 飯村和道)



※プロジェクトチームメンバー（短期大学部 造形学科 デザインコース教授 伊勢亮也、同コース講師 佐藤真澄、芸術学部 メディアアート学科教授 ヤマザキミノリ、デザイン学科教授 飯村和道、同学科准教授 林規章）

Topics ● ① 美術教育フォーラム2007

毎年恒例で開催されていた「教育フォーラム」。今年は「美術教育フォーラム」と名称を改め、8月1日に、『がんばれ美術・図画工作』というテーマで、国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議室で開催されました。小・中・高等学校の図画工作・美術科担当の教員や教員志望者など昨年よりも40名程多い182名の参加となりました。

主催者代表として小倉芸術学部長の挨拶があった後、第1部として増田金吾先生より、『今、求められる図画工作・美術科における「指導」のあり方』と題した基調講演が行われました。午後からの第2部では、教育現場からパネリストを招き、『美術・図画工作教育の必要性と発展性』をテーマと

した事例発表がありました。続いてフロアからの質問や意見に対する各パネリストのコメント、補足説明などが熱心に行われ17時前に閉会となりました。なお引き続き、講師、パネリストを囲んだ懇親会が行われました。

●基調講演講師 増田金吾（東京学芸大学教授）

●パネルディスカッション

パネリスト

千葉 成夫（中部大学国際関係学部教授）

遠藤 友暁（女子美術大学芸術学部客員教授）

原田 敬一（神奈川県相模原市立大野南中学校教諭）

小林 正子（神奈川県相模原市立緑野森中学校教諭）

鈴木 淳子（東京都町田市立本町田東小学校副校長）

コーディネーター

佐藤善一（女子美術大学短期大学部常務理事）

●後援 東京都教育委員会

●参加者182名の内訳：小学校教諭22名、中学校教諭61名、高校教諭22名、特別支援学校教諭6名、大学生17名、本学教職員19名、その他35名



Topics ● 2 梨園染 戸田屋商店創業135周年記念 「注染づくし」 見たり・聞いたり・話したり

3月22日～25日、江東区深川江戸資料館にて、ゆかたと手ぬぐいの老舗、梨園染戸田屋商店の創業135周年記念「注染づくし」見たり・聞いたり・話したりが開催されました。

開催期間中は、注染の手法紹介や来場者も参加可能な注染の実演、新作の展示や販売等に並んで、本学芸術学部工芸学科教授・大澤美樹子先生と戸田屋商店・小林永治氏によるトークショーや、芸術学部工芸学科の学生による注染の作品展示、ファッション造形学科の学生による手ぬぐいをつかった衣類・小物の作品展示もおこなわれ、4日間で2000人近い来場者がありました。

注染は、明治時代後期に考案され、現在に続くゆかた・手ぬぐい染色の代表的技法であり、本学は注染を正式な授業に取り入れている唯一の大学です。



Topics ● 3 観音崎公園トイレアートプロジェクト

1月に、神奈川県立観音崎公園の指定管理者である「横浜緑地・西武造園グループ」主催の『トイレアートコンテスト』において、デザイン学科4年生の3作品が選考され、園内3カ所のトイレ空間に相応しいデザインで制作された作品が、3月末に設置・一般公開されました。タイトルと制作者はそれぞれ、①第6駐車場トイレ、「気分そのままトイレ」横田智里。②戦没船員の碑トイレ、「波声」青木味里・鈴木友理。③花の広場トイレ、「Honeycomb ハニカム」雨宮玲子・斉藤和知。

「でかける人を、ほほえむ人へ」という主テーマのように、明るく楽しいトイレになったと利用者から大変喜ばれています。ぜひ、見に行ってください。

(芸術学部デザイン学科教授 田村 俊明)



①第6駐車場トイレ



②戦没船員の碑トイレ



③花の広場トイレ

Topics ● 4 「タイポグラフィ・タイプフェイスの諸相」の講義録が書籍に

2006年度に行われた女子美術大学図書館主催の特別講義「タイポグラフィ・タイプフェイスの諸相」の講義録が、女子美術大学より発行されました。同書籍は、ISBN（国際標準図書番号）を付され、一般の書店でも購入可能です。

特別講義の企画立案者は本学大学院客員教授の森啓先生で、大学院博士後期課程3年在学中の佐賀一郎さんが書籍化にあたってブックデザイン、本文基本型設計を担当されました。

【概要】

印刷文字のかたちは時代とともに変化してきました。この本は、現代の印刷文字をデザインする5人の書体設計家と、その文字を使用して印刷物のデザインを設計する3人のデザイナー（タイポグラファー）が、それぞれの作品の成立過程について語った貴重な講演集です。多くの図版や実例を紹介し、印刷デザインの仕事に携わる人や、タイポグラフィを学ぶ学生にとって必携図書といえます。

発行：女子美術大学
発売：日本エディタースクール出版部
ISBN978-4-88888-833-2 C2000
AB判（ヨコ210ミリ×タテ257ミリ）並製200頁
定価2520円（本体2400円＋税）



「タイポグラフィ・タイプフェイスの現在—5人の書体設計家と3人のタイポグラファーの思い」
森啓・小塚昌彦・鳥海修・桑山弥三郎・中村征宏・小宮山博史・工藤強勝・永原康史著

Lecture ● ① 現代美術作家 やなぎみわ氏特別講義報告



6月25日、大学院生対象の藤原えりみ先生の現代文化論の授業の中で、国際的に注目を集める現代美術作家のやなぎみわ氏の特別講義がおこなわれました。約3時間に及ぶ講義の中で初期の頃から現在に至るまでのお仕事の流れを詳しくご紹介いただき、その後、学生と藤原先生からの質問にお答えいただきました。ここではそのごく一部をご紹介します。

伝統工芸からインスタレーションへ

学生時代は、ほとんどの時間を制作室で過ごしているという熱心な学生でした。通っていた京都市立芸大は山の中にあって、ほとんど世間と隔離された状態だったので、情報から遮断されているかわりに、自分の内面を掘り下げていく制作時間が多く持てたと思います。1989年、4年生の卒業制作展と同時に、貸画廊で初個展をやったのですが、そのときの作品写真を今日はお見せしますね。間口5m、奥行き15mくらいの画廊内一杯に布地と植物（苔など）で埋めつくされたインスタレーションです。これより以前の作品というのは、さらに伝統的な染織工芸です。京都の伝統的な染織に、型友禅という技法がありますが、そういう技法を使って作っていました。形態は、着物や屏風、パネルなどがほとんどでした。だから4年生になった時に、いきなりこういう作品を作り始めて、周りに驚かれた記憶があります。私自身は、伝統工芸は好きでしたし向いていると思っていました。制作プロセスの制約が強く、素材・技法をきちんと押さえて、段取りや手順に従って進めていかなければいけないのですが、決してそれは嫌いではなかったです。そういう

工芸的完成度やフィニッシュワークへのこだわりは今もありますね。

ただ、何作品も作っていくうちに、だんだん息苦しく感じるようになりました。油画や彫刻の制作を脇目に見ていたせいもあるでしょうが、自分の考えが赴くまま、変化するままに作品にも変化を加えたいと思いはじめました。例えば型染め過程で、糊を置いたまま、その糊を水洗せずそのまま樹脂で固めてしまうような、プロセスを中断させるものを作ってみたり、正当な素材をあえて使わずに、非常にチープな素材でやたら量を作るとか、そういうことを3・4回生の時に試しはじめたんです。

『エレベーターガール』は通勤途中に

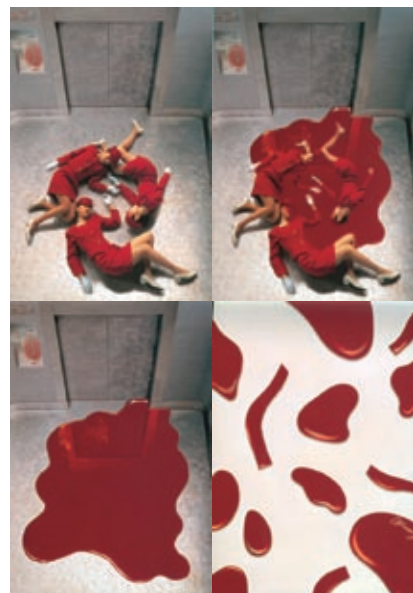
当然就職活動は全くしませんでしたね。制作をするためには、就職なんかしたら絶対にできなくなると思い込んでいたので、アルバイトなどをしながら、何とかやっていければいいなと思いつつ気軽に修業式を迎えました。すると専門学校や大学の非常勤職の声を掛けてくれる人がたくさんいて、あれよという間に、私は週に6日も働く教員になってしまいました。どれもアルバイトなんですけど、忙しくて、生活はできたけれど、制作はできなくなりました。大学院を修了して、だいたい3年間ぐらい、制作を全くしていないというブランクができてしまったんです。

その間、もう制作をやめようと思ったことはないですが、もしかしたらこのままだんだん自然に制作から離れていくんじゃないかなという不安はありました。けれども、『エレベーターガール』は、通勤途中に電車の中でスケッチをしたりしながらの3年間で作ってきた作品です。当時私自身が、教員として、ひたすら学校のカリキュラムにのっとって授業をし、小さい講義室ですつと美術史概論を話したりしていました。その時に、社会の中の小さな箱の中で演技する自分というのと、通勤の時に駅やデパートで毎朝毎夕見かけた案内嬢、若い女性とがダブリ、商業施設でせめぎあう消費者と労働者について考えるようになりました。とにかく『エレベーターガール』をモチーフにして何かできないかと考えましたが、私は写真もコンピュータも大学中にやったことがないので、結局思い付いたのが、

実際にエレベーターガールの生身を画廊に展示するということがあったんですね。今思えば、よくそんな荒唐無稽なアイデアを見切り発車で制作したと思いますが（笑）。とにかくそれがエレベーターガールシリーズのはじまりの作品であり展覧会。『The White Casket』（「白い小さな箱」とか、「白い棺」という意味）というタイトルでした。

これを見た某公立美術館の学芸員の方が、うちの美術館のグループ展に出さないか、と。うれしかったのですが、とにかくスペースが広い。そして作家への制作費はゼロ。悩んだのですが結局出品をしました。会期中の日曜日だけに、制服を着た女性14人を連れていき、他の作家の作品も含めて展覧会作品全ての解説をするというパフォーマンスをやりました。展覧会の観光化、ショールーム化ですね。制服も全部自分で作りました。来館したお客さんは彼女たちの解説（学芸員が執筆した難解なテキストは解説ガールたちが判り易く変更された）を聞いて記念写真を撮ってもらうと納得して帰っていく。今考えれば、なかなか面白い作品じゃないかと思うのですが（笑）その時は毎週美術館が大騒ぎになって疲弊しましたね。

正直、私自身はこういう作品をこれから毎回続けていけるだろうかという不安に駆られました。それまでなんといつても工芸とファイバーワークの引きこもり制作しかやっていないわけですから、「ああ、どうしよう」と思いながら、不安を消すようにま



『The White Casket』 90×77cm(×4) 1994

た手作業の作品を家にこもってこっそりと作った。それが初めてのエレベーターガールの写真作品なんです。実際にすごく小さくて30cmぐらい。エレベーターの模型を手作りし、その上から35mmのカメラで撮影。この時初めて家にマックがきたので合成作業というのをやりました。自分で絵の具を流したりフィルムをスキャンしたりコツコツと楽しかったです。誰に見せるつもりもなく等身大の作品ができて安心していました。

初めての海外展

ただ、運命とは不思議なもので、全く部屋から出したことがない作品が、なぜか海外展に出品されることになりました。その時欧州から来日していたキュレーターとふとしたきっかけで会うことになり、ドイツのフランクフルトの展示会に出してみますか？と言われるがままに、96年の春に自ら大きなプリントの筒を持って独りドイツに行きました。前出のエレベーターガールの小さな作品だけでは足りず、新たに大きな作品も作りました。なぜか7mの壁紙のようなサイズ。ドイツで展示会に出すということで、安いデジタルプリントではなくなんとかフォトプリントをしたいと思って業者にツケをお願いして。それでも額やアクリル加工はできませんでした。私の作品の向かいにはジェフ・ウォールで、その隣はサム・テイラー・ウッド。隣の部屋はシンディ・シャーマンという具合でしたね。

いろいろ取材もありましたが、全く未知のドイツ人から「作品を売ってほしい」とも言われその意味がわかりませんでした。大学時代の先生方は皆さん会員展の偉い面々だし、作品を売る美術家なんて日本でそれまで会ったこともないわけです。「これ、売り物じゃありません」と言ひまして、それでも売ってほしいというので、売りたい一心で適当な金額を言ったら、「その額ならリヒターも買える」って(笑)。

しかし海外展に行ったからといって、いきなり状況が変わったわけではなく、日本に帰ればまた日常が待っていて同じように借金を重ねながら制作をしていました。もちろん教員もしながら、とにかく制作を続けるのに懸命でしたね。

『エレベーターガール』は99年に一段落させました。合成作業が複雑化し、その方の完成度が上がってきて、工芸品としてはいいかもしれませんけど。ただ緊張感が



『YUKA』 160×160cm 2000(『My Grandmothers』より)

なくなっていくように思った時はそこで辞めた方がいいんです。

『My Grandmothers』

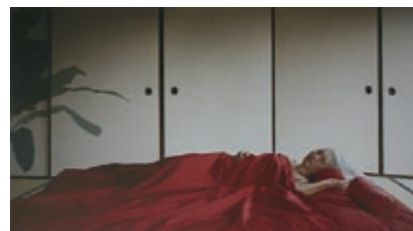
2000年頃から『My Grandmothers』というおばあちゃんの肖像写真のシリーズが始まります。このシリーズは少しずつでも続けて作ろうと思っていて、現在でも続いています。モデルを一般に公募し「50年後にどうありたいか」というインタビューをして、話し合いながら、そのアイデアを元に作品を作っていくという、他人とのコミュニケーションからスタートする作品。『エレベーターガール』のように、私がモデルたちを人形のように配置し、さらに合成に時間をかけるという作品とは違って、他人の意思が入ってくる以上、完全には思う通りにならないわけです。最初の頃の『My Grandmothers』は、本当にモデルの言う通りにディテールも全部作ろうとしていたので、モデルが白髪と言えば美容室で全部脱色してもらって白髪に。100歳以上にしてほしいと言われれば特殊メイクで100歳以上に。服はこんな感じがいいと言われれば、オーダーメイド作り、ロケも希望通りにやっていましたから、大変でしたよ。今は30点近くになっ



『SACHIKO』 86.7 x 120cm 2000



『AI』 80×120cm 2004



『YAYUMI』 58.3×100cm 2001

てますが、どちらかというモデルの意思よりもモデルを厳選するようになりましたね。若い奇抜なアイデアも良いのですが、もう少しモデルとのやり取りを重視し、そこから作品へ反映されるモデルの性質を優先しています。



『無題 I』
『fairy tale』のシリーズのストーリーテラーのポートレート

『fairy tale』

『fairy tale』という寓話シリーズは、グリムやアンデルセン、ガルシア・マルケスの寓話的な小説など、既存の物語からインスピレーションを得て作っています。いろいろな物語のパロディなんですが、ただこの縦長のテントをかぶった女性の作品、これは寓話シリーズのストーリーテラーのポートレートということになっています。これは寓話シリーズのシンボリックな作品です。このテントの中で、語る者と語られる者、老いと若さが入り交じっている状態、そういう正体不明の女性が色々な物語を語るという設定で作っています。

寓話シリーズでは、女の子と老婆という二つのキャラクターが出ている物語をチョイスしているんですね。『赤ずきん』の祖母と孫娘。『眠り姫』に出てくる呪いを掛ける魔女とプリンセス。西洋の童話はアジアの民話よりも、善悪、無垢と老獪、はっきりした二項対立があります。

モデルは、だいたい15歳から12~13歳ぐらいの女の子。近所のお子さんにやってもらっているので、普通の小学生ですよ。基本的に寓話シリーズは特殊メイクじゃなくてマスクが顔に乗っかっているだけなん

です。つまり老女と少女を演じている2人の子どもは常に交代可能なんですね。マスクの着脱で老若が逆転するという状態になっているわけです。だから姫君役のつもりで来たら、老婆役というちょっと可哀想なことよくありました。

寓話シリーズは二十数点ありますが、全部私の家の中で撮っています。大正時代の家なのですが、6畳ぐらいの狭い洋間があって、この部屋の壁を落としてみたり、天井に穴を開けたり、床を抜いたりしながらこの部屋の中で寓話シリーズを制作しましたが、いよいよ雨漏りもして危険だったので、修復して寓話シリーズの制作は終了。箱のような小部屋の密室劇は、やはり「暗箱」で撮るべきということで、撮影は、ゼラチンシルバーの一番古典的な方法を使っています。

個人的な体験は語らない

学生：やなぎさんのそれぞれの作品にある裏付けとなる個人的な体験や経験がもしありましたら、お聞かせください。

やなぎ：個人的な体験。それはいろいろありますよ(笑)。皆それぞれにあるはずですよ。

時々大学の合評に行ったりするんですけど、最近皆個人的な体験を語りますよね。トラウマとか生き辛さとか。それを作品の前で語る必要はないのでは？

例えば叶えられない不能感が昇華される制作というのは、人間の表現で一番スタンダードな形であって、今さら言うことでもないわけです。作品は分泌液ではなくて意思で完成させるもので、液体や気体を固形化させる化学反応の大きなエネルギーがその時に働くわけですから、そちらの方が面白いですよ。



『エレンディラ』 100×100cm 2004

言葉を越える作品を作る

学生：コンセプトをどのように考えられるのかについて伺いたいです。

やなぎ：言葉で考えると、奇抜で先鋭的なことは色々と考えられると思います。言葉のほうが批判性が強いし前にいく力は持っているんで、暴走しますよね。「あ、これは新しいのではないか、面白いんじゃないか」と、突飛なフラッシュアイデアは、私は言葉の上で次々出てくるんです。でもそれを制作にかかろうと準備する時に必ず挫折するんですよ。なんてつまらないんだろうと。

例えば□□イズムアートとかよくいわれますけど、フェミニズムでも反資本主義でも結局思想を超えない作品ってつまらないですね。ビジュアルで人にざわめきを与えるっていう。ラディカルな異化効果をいくら使っても、初めに言葉で考えて、そこからビジュアルを発想するっていうそういうステップだと、どうも言葉を越えないんです。私も言葉で考えて、結局形にならなかったものは結構たくさんあります。じゃあその時間は無駄だったのかというと、決してそうでもなくて、そういうものがあるから、最終的に言葉より身体が動いたなんてこともありますね。この『砂女』もそうなのですが、いろいろ言葉で考えて疲れたあとに、ふと求めていた「姿がやってくる」ようなことがあります。

作品を人に見せるということ

学生：作品を見る人、見られる人、お客さんと自分の考えというのを意識していらっしゃるのかどうか伺いたいです。

やなぎ：人に見せるかどうかという問題で



『眠り姫』 100×100cm 2004

すが、それはいつも考えています。何で人に見せるのかということは、いつも自問しているし、他人や学生にもいつも尋ねます。何でこの作品を見せようと思ったのか。そのために他の人はわざわざ時間と労力を割いてその場所に来るわけですね。入料なんかを取る時もある。例えば山の中にもって作品を作って、自分だけが作って見て所有して納得するという方法もあると思うのですが、なぜかみんな人に見せたがるわけです。私自身の理由を言えば、作品というのは結局、人に見せることによって新しい磁場のようなものが発生するのを信じているのです。他人が、どこからか湧いてきたものを見せられて、理解するはずもない。そこで生まれるのは勝手な解釈や思い込み、トンチンカンな感想だったりするのですが、その誤解は、慧眼も含めてやっぱり他人の価値だと思うのです。時々自分の想像力を超えて、すごい解釈があったりする。それで喜んでいて、いきなり裏切られたり(笑)。そういう、決して自分の思う通りにならないのが他人の価値です。他人を怖がらずにコミュニケーションを取るか、そうでなければ、ヘンリー・ダーガーのように60年間人知れず作って無垢なまま暴かれるか。ちょっと極端ですが(笑)。

「老い」を考え続ける

学生:『エレベーターガール』以後、いずれの作品も老女が関係している作品ですが、「老女」という対象をどういったものとして扱っているのでしょうか。

やなぎ:老若に関しては、私の中では考えあぐねながらずっと作っているという感じですね。私の中で結論は出ていません。昔から、老若というのは、無垢の人や賢人として信仰の対象であったり、軽蔑や恐怖

の対象であったりしますが、風俗文化としては面白いですが、そういう周辺化、差別化だけでは本質を見誤ることになります。女性の人生の中で一番真ん中の部分、生殖期間がない。例えば家族を持ったり仕事を持ったり、最も社会的であり他者とかかわる時期が欠落しているのが少女と老女です。『My Grandmothers』の募集をしている時に、特に昨今の若い女性たちが、人生の真ん中を拒否しているんじゃないか、面倒くさいと思っているんじゃないか、できれば少女から一気に老女に飛びたいと思っているんじゃないかと感じました。実際に私の中でもその傾向があって、社会を拒否して自分の全能感を温存したい今の風潮かもしれません。しかし、加齢や老いへの思いやリアリティというのは年々変わっていきます。10年前に想像した老いと、今は違いますし、また10年後も大きく変わっていくと思います。人間が老いるということと、それから死ということは、身体的な想像力と繋がっていて、ずっととらえて放さない一つのテーマです。

アトリエを出て働いたことの意味

藤原:布を使った大学時代の割と大きなインスタレーション作品から、『White Casket』、『エレベーターガール』に至る間に、やなぎさんの中で、制作しなかった3年間に一体どういう変化が起きていらしたのかなと。作り手としての意識のあり方が全然違っているような気がするんですが。

やなぎ:作っていない3年間は、ある意味非常に貴重だったなと今では思っています。どうも自分の傾向として、ある程度自分を他者に向かって開かず制作だけしていると、グーッと閉じてくるような、そういう傾向があって、実際に学生の時の6年間は

そうでした。もしあのまま、例えば経済的に全く心配なく、卒業したら親がアトリエをポンと建ててくれたような環境で、ずっと好きな制作を続けていたら、たぶん今に至らないんじゃないかなと思うんです。あの時に一旦大学のアトリエ棟を出て、毎日通勤して月給をもらうことによって、非常に退屈な毎日の中で、気付くことは色々ありました。自分がこれからアートとどう関わればいいのか、だいたいアートって必要あるのか。大学の純粋培養の制作期間に気が付いたこと、美術から遠ざかって満員電車の中で考えたこと、結局どちらも必要だったんですね。



やなぎみわ

神戸生まれ。
京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。
93年に京都で初個展。
以後、96年より海外の展覧会にも参加。
若い女性が自らの半世紀後の姿を演じる写真作品、『マイグランドマザーズ』シリーズ、実際の年配の女性が祖母の思い出を語るビデオ作品『グランドドーターズ』を制作。
2004年、ドイツ・グッゲンハイム美術館にて個展。同年、丸亀市猪熊弦一郎美術館にて個展。
少女と老女の物語をテーマにした写真と映像のシリーズ『フェアリーテール』を、2005年、原美術館と大原美術館にて発表。
2007年、ニューヨークのチェルシーアートミュージアムにて個展。
来年、テキサス・ヒューストン美術館へ巡回予定。
その他
2005~2006年度 朝日新聞紙面審議委員
2006年度より 神戸芸術工科大学准教授



「赤ずきん」 100×100cm 2004



「グレーテル」 100×100cm 2004



「マッチ売りの少女」 100×100cm 2005

Lecture ● 2 フェミニスト・アーティスト ジュディ・シカゴ氏講演会報告 —「History」から「Herstory」へ—



7月24日、本学杉並校舎で、世界的に有名なフェミニスト・アーティスト、ジュディ・シカゴ氏の講演会がおこなわれました。今回シカゴ氏は、芸術学科の南畠宏教授が館長を務める熊本市現代美術館で開催中の展覧会「ATTITUDE 2007」への参加に合わせて来日され、南畠教授の企画により、日本で最初に女性に美術の高等教育への門戸を開いた本学でも講演をしていただく運びとなりました。

シカゴ氏はフェミニズム運動が盛り上がりを見せた1970年代、アーティストとして、また教育者としてフェミニスト・アートの確立に大きく貢献し、現在までにそのキャリアは40年を超えます。氏の代表作である《ディナー・パーティー》は西洋の歴史の中で偉業を成した女性を象徴した作品で、世界6カ国16箇所で展示され、100万人を超える人々によって鑑賞されました。

講演会では、はじめに佐野ぬい学長による歓迎の挨拶があり、シカゴ氏からは氏のプロジェクトを含む数多くのフェミニスト・アート作品の紹介とともに、フェミニスト・アートをめぐる当時の文脈について、永谷まみ氏の通訳のもとお話いただきました。ここにその内容の一部をご紹介します。

フェミニスト・アートとは

みなさんの中でどのくらいの方がフェミニスト・アートについてご存知でしょうか。フェミニスト・アートについて理解するためには、まず、長い間美術史の中から女性が締め出されてきたことについて理解する必要があります。女子美術大学の設立の経緯からもわかりますように、つい最近まで、世界中で女性が美術の教育を受けることが妨げられてきました。みなさんが美術館に

行って美術史を学ぶときには、男性の美術の歴史を学ぶこととなります。1970年代には、西洋の女性たちが、こういった動きに対してもうんざりだと、声を上げはじめ、女性たち自身の視点を表現するための新たなアートを創造しようという動きがはじまりました。それがフェミニスト・アートです。

私の作品《ディナー・パーティー》について少しだけ説明しますと、これは非常に大きな作品で、この教室には入りきりません。一辺が16メートルあります。西洋文明の中で非常に大きな業績を残した女性をすべてここに表現するにはこれでも足りないくらいです。時々、「どうして西洋の女性だけなのですか？」という質問を受けますが、これだけでも大変な仕事です。みなさんのような若い世代の方に、ぜひ東洋の女性たちの活躍について研究をしていただきたいと思います。美術史の中に女性の業績を加えるという作業には本当にたくさんの人々の協力を要するからです。《ディナー・パーティー》はその第一歩だったのです。

フェミニスト・アート・プロジェクトの立ち上げ

大学院時代は、アーティストとして認めてもらうために、女性としての衝動や経験を遠ざける努力をしていました。それも数年もすれば嫌気がさしてきました。という

のは、自身の性から逃れようとするはずするほど、それは余計に私を煩わせるようになってきたからです。当時は「おまえは、女性にも、アーティストにもなれない。」という言葉をよく耳にしました。

60年代末には、女性運動が起こり、私は存在を肯定された安堵感にも似たものを感じていました。そこには、私と同じような経験をした女性たちの声が綴られていたのです。

同じ頃、自分なりのやり方で、女性の歴史を紐解く試みを始めていました。そして、あふれるほど豊かな、しかし明かされずにきた女性たちの歴史に触れた私は、その知識を少しでも多くの人と分かち合おうと、1970年、アートを介したプロジェクトを立上げるために、そしてひそかにフェミニスト・アートの確立を目指して、カリフォルニア州立大学フレズノ校へ赴きました。若いアーティストたちが、女性としての生活や経験から切り離されることなしに自己確立できるよう手助けをすることで、私自身も10年前に振り払おうとした内なる衝動と、もう一度結びつくことができるかもしれないと感じていました。プロジェクトは未知の試みでしたが、嬉しいことに、生徒たちは非常に熱心に応えてくれました。

当初たった一人で理想の道を歩んでいましたが、この頃、芸術の実践、批評、美術史、教育に急進的な変化をもたらすことに

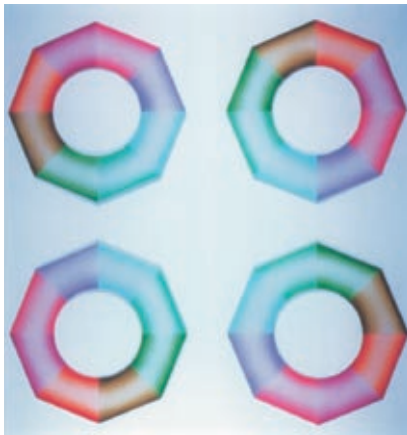


The Dinner Party 1979

Photo: Donald Woodman

1辺が13席のテーブルが三角形に配置され、西洋文明の中で重要であると考えられる女性の名前が刺繍されたクロス、陶器の皿、グラスなどが置かれた作品。皿の装飾は女性器のイメージをモチーフにしている。刺繍や料理に焦点を当てることで、女性の役割を一方向的に押し付けてきた社会制度に対する批判が示されている。

なる様々な動きが起きていました。時を経ずして、リンダ・ノックリンが、『女性巨匠未出現の謎』と題した画期的なエッセイを出版します。NYの女性アーティストはすでに、ホイットニー美術館の周りに、卵とタンポンを置き、『ホイットニー・アニュアル』展に女性の出品がないことに抗議の声をあげようとしていました。また、国内のいたるところで女性たちが、時には男性たちが、芸術界、美術史界に挑み、そのありように変革を起こし、女性と女性の経験が価値あるものとして受け入れられるよう奮闘していました。



Pasadena Lifesavers-Red Series #4 1969-1970
15点から成るシリーズで、アクリルシート、アクリルラッカースプレーの作品。

ウーマン・ハウス

フレズノ校でのプログラムが大変な反響を得たことで、1971年の春、カリフォルニア芸術大学の当時の美術学部長ポール・ブラックの招待を受け、彼の妻で画家のミリアム・シャピロの協力をもって、新しい学校に私のプログラムを導入することになりました。ミリアムとチームティーチングを始め、初学期に、カリフォルニア芸術大学のフェミニスト・アート・プログラムの学生たちと共に制作したのが、ウーマン・ハウスです。この学生たちの中から後に、フェミニスト・アーティストの中心的存在として活躍するものも輩出されました。

このウーマン・ハウスをきっかけとして、女性が自らの経験に沈黙することを止め、女性としての独自の経験を公に表すことができるようになったのです。1か月の間に大変多くの観客が訪れ、美術界を震撼させました。ここから、さらに数々のアイデアが生まれ、現代美術に脈々と受け継がれることとなったのです。特に、性と体の問題、自身の投影、個人、社会、政治の物語を扱っ

たもの、これまで埋もれていた、あるいは低く評価されていた手法を取り入れたものが多くあります。

フェミニスト・アートの「視点」

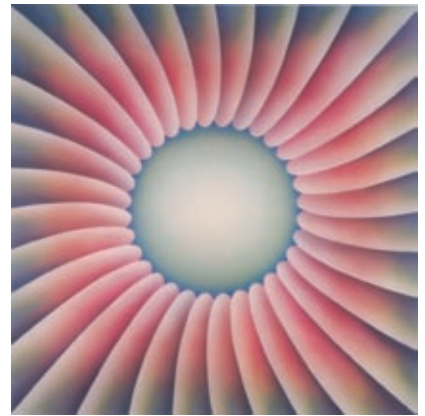
私を含めた女性アーティストたちが当時立ち向かっていたのは、特に女性の体に対して蔓延していた男性中心の見方です。

ギュスターヴ・クールベの、1866年の作品、『世界の起源』とハンナ・ウィルケの『イントラ・ヴィーナス』シリーズを比較してみます。どちらも仰向けに横たわった女性の裸体がモチーフになっていますが、クールベのものは、頭部のない女性を描写した、明らかに、男性の視点からの作品です。このタイトルから連想される作者の意図は、極めて曖昧なものです。生命は女性の体に起源を持つ、といたいのか、はたまた、その同じ体を単なる受け皿にまで貶めているのか？頭部がないということ、つまり、人格と脳が欠如しているということは、女性の側から立ち上がる力が全く欠落していることを示しています。それとは対照的に、ハンナ・ウィルケのものは、末期がんに侵され、死へと向かっていくアーティスト自身を差し出しています。彼女は自身の裸体を介して、性とアイデンティティの問題を扱った一連の作品から身を起こした人です。病と治療の苛烈さから、美しさを奪われた彼女は、クールベの頭部のない美女から、死と向き合う女性の力と勇気の視覚的イメージに転化することで、クールベへの逆襲を果たしたのです。この二つのイメージが物語るものは、似通った内容であっても、性差や、作者の視点などから、際立った違いが生み出されるという事実です。

フェミニスト・アートは作品の様式よりも意味合いに重きを置きます。これまでの芸術の流れは、伝統的に、様式によって型を決定していくという手法で認識されてきましたが、フェミニスト・アートは、様式が一致するというよりも、内容の中に関連性があるのです。そしてまさにこういった性格が、定義、分類を困難にしていたといえます。

フェミニスト・アート運動が最高潮に

女性史をアートを通して振り返る。そのことに集中するために、1974年教壇をおり、70年代の残りを『ディナー・パーティー』の制作に専念することとなりました。



Through the Flower 1973
シカゴ氏は同タイトルの著作も発表しており、その表紙となった作品。著作には氏の人生の闘争と、フェミニスト・アートへの初期の考え方が綴られており、日本を含む世界中で翻訳された。

た。当時の私のフェミニスト・アートに対する認識は、女性に手を差し伸べ、肯定し、その経験の正当性を認め、女性であることが心地よく思えるようにするもの、とでも表現すれば理解していただけるでしょうか。同時に、そういった意図が常に社会と結びついていなければならないとの思いもあり、そのためにイメージするものがよりわかりやすく、できるだけ多くの聴衆に影響を与えるように、苦心を続けていました。

私が盛上りに一役買ったフェミニスト・アート運動は、最高潮に達し、特に西海岸では、私とデザイナー、シーラ・ド・ブレッテビレと今は亡き美術史家アーリーン・ラーヴェンが1973年に創設したウーマンズ・ビルディングが、順調に若い女性アーティストを育てていました。この進り出るような勢いが女性アーティストの作品に社会的認知を与えることとなりました。

70年代のフェミニスト・アート運動は確かに歴史に変革をもたらしました。女性アーティストが、女性としての経験を堂々と仕事として表現することができるようになったのです。70年代以前には女性性を基にしたテーマが受け入れられることなど、考えられませんでした。しかしながら、このムーブメントを美術界の主流は無視してきました。理由は様々ですが、形式よりも意味合いを重視する点がわかりにくかったこと、また、男性の芸術を唯一重要なものとするところから得られる恩恵を手放したくないという思い、そして、はじめての確かな変革が、女性の力によってなされたことを真摯に受け止めることができない、などが考えられます。彼らは今日なお、フェミニスト・アートを70年代の一過性の現象として捉えがっているようです。

《バース・プロジェクト》・《ホロコースト・プロジェクト》



Holocaust Project Logo 1992
ホロコースト・プロジェクトのロゴ

1980年～1985年には出産をテーマにした《バース・プロジェクト》という大規模なプロジェクトに取り組みました。

1985年～1993年の8年間は夫ドナルド・ウッドマンや生え抜きの匠たちとのコラボレーションによって、ホロコーストを現代の文脈の中で検証する、《ホロコースト・プロジェクト》に取り組みました。プロジェクトの調査を通して私が感じたことは、地球上にいままだ蔓延する忌々しき諸問題、紛争、殺戮、飢餓、貧困などについて、女性の声が聞こえてこないということです。

もう一つの試みは、女性をホロコーストの歴史に描き込むことでした。世界中のホロコースト展で、決定的に欠落している要素です。

世界のフェミニスト・アートを目撃する

90年代には、女性のアイデンティティに止まらず、より広い視野で世界の問題を考え始めていました。現在認知されているパラダイムに取って代わるものを希求したいという思いをもっていました。

世界中を旅する中で、フェミニスト・アートが、個人的な側面でも、美学的見地からも、幾重にも姿を変えて昇華するさまを目撃しました。その多くが依然として女性のアイデンティティ、性差、虐待について論じています。また、フェミニスト・アートの定義が広がりを見せていることにも気がつきました。地域、文化、人種、民族、性的指向、階級などあらゆるアイデンティティの属性によって、メッセージが発信されるようになっていたのです。これは、まさに私が夢として思い描いていたことでした。やがて「グローバル・フェミニズム」と名づけられることになる、世界規模のフェミニスト・アートです。

90年代の文脈

1996年、UCLAのアーマンド・ハマー美術館の招待で、70年代のフェミニスト・アートの権威であるアメリカ・ジョーンズ博士は《ディナー・パーティー》を20年の芸術理論と実践の文脈の中に置く展覧会《セクシャル・ポリティクス》を企画しました。アメリカはフェミニスト・アートを歴史に組み込み、70年代のフェミニズムの多様性の理解と歴史的位置付けの欠如を問題化して、そのために若いフェミニスト世代はこれまでに得られた貴重な見識に触れることなく、語り尽くされた理論を再び展開するという無駄な努力を繰り返している、と語っています。この、歴史的抹殺こそが、私が《ディナー・パーティー》を創造した根拠となるものでした。

全く残念なことに、この頃までには、フェミニズムは忌むべきものへと貶められていました。メディアと右翼の飽くなき誹謗中傷によって、若い世代は、200年にわたる、数え切れない女性たちと幾人かの男性の努力の末にようやく実現した権利を感謝して受け取るどころか、係わり合いを敬遠するようになってしまいました。「私はフェミニストじゃないですから」といいながら。

1999年には、25年離れていた教職に戻り、美術教育の変化を見届けるつもりでいました。いい動きは多少あったものの、総合的なフェミニスト・アート運動の歴史は、美術史の正典から消されつつありまし



Find It In Your Heart <勇気を出して>
等身大の木彫の作品。人種も性別も定かではない、誰でもありうる人物がモチーフになっている。表面に刻まれた文字「今日の一针」は22ヶ国語で「世界の問題に、あなたの心を」と訴えかけている。

たし、相変わらず、美術史と美術館双方で、女性アーティストは男性の添え物として扱われていました。

継続すること

2007年3月には、ロサンゼルス現代美術館で《WACK！芸術とフェミニズム革命展》が、キュレーター、コニー・パトラーの企画で開催され、これを皮切りに現在全米を巡回しています。1965年から1980年のフェミニスト・アート運動に焦点を当てたものです。また、2007年3月～7月にはブルックリン美術館で、1990年から現在までのフェミニスト・アートを紹介する《グローバル・フェミニズム展》がモーラ・ライリー、美術史家リンド・ノックリンによって開催されました。時を同じくして、同美術館は世界初、フェミニスト・アートのための、エリザベス・A・サックラー財団フェミニスト・アートセンターを立ち上げ、私の《ディナー・パーティー》を常設展示する形でオープンしました。

これらの展覧会が打ち立てたもの、それは、継続です。より広範な歴史的な文脈に裏打ちされてはじめて、真価を発揮するのです。女性史の開拓者、ゲルダ・ラーナーは、私たちは、先達が残した偉業を知らないために、とうに偉大な女性が産み出した深遠な思想や創造物の上に新たな業績を積み上げることなく、無駄な努力を積み重ねてきたのだと言います。私は、たとえそうであっても、何度でも、繰り返して、どんな主流の美術機関でも、大学の芸術や美術史の講義でも打ち消すことができないくらい続けられたいと思うのです。

遺産を受け継ぎ発展させること

《ディナー・パーティー》のブルックリン美術館への常設展示へ向けた準備の中で、もう一度徹底的な調査を行いました。おかげで、テーブルと床に綴られた1038人の女性たちの全体像がより鮮明に浮かび上がってきました。それと同時に酷い事実も明らかになりました。その時代時代には、成功を収め、名声を博した女性、何十冊もの本を書き、何百もの絵画を描いた女性が、奮闘の末やっと成し遂げたその偉業を、数十年も経たぬうちに拭き去られてしまうのです。こんなことの繰り返しはもう終わりにしなければなりません。これからの世代は受け継がれた遺産の上に築かれるべきですし、そこには、当然、女性も含まれるべきです！私たちの今広がりつつある遺産を

守るには、現行の諸機関がきちんとした認知をし、それなりのスペースを提供する必



The Dinner Party 1979
エレンア オブ アクイティンのプレート

要がありますし、このテーマに特化した関係機関の出現も待たれます。私がホロコースト・プロジェクトの中でユダヤ系機関と触れ合い学んだことは、「記憶はモルタルに塗り込まれる」ということ。つまり、文化は地場を通して伝達されるのです。女性はこのことをぜひ学ぶ必要があります。

今日ご紹介したのは、広範で多様なフェミニスト・アートのほんの一部にすぎません。これから先は、あなたが広げてみてください。「こんなにもたくさん!」、と心が弾んだら、もう大丈夫、きつともっと聡明になり、刺激を受け、勇気づけられて、これまでとは違った自分に出会うことができるでしょう。そうしたら、必ず、文化遺産として、永久に刻み込まれるまで、ずっ



学生だけでなく全国から研究者や作家、評論家の方々など200名以上の参加がありました。

と続けてください。エリザベス・A・サックラー財団フェミニスト・アートセンターが、《ディナー・パーティー》や、成長を続けるフェミニスト文化を受け止め、差し出しているように。最後に一つだけ、一人では何もできません。

Topics ● 5 スポーツフェスタ開催

5月26日、相模原キャンパスグラウンドにて、スポーツフェスタを開催しました。スポーツフェスタはスポーツを通じて、学科・学年を越えて交流を深めるイベントです。当日は快晴の中、芸術学部・短期大学部合わせて約1000名の学生と教職員が参

加しました。学科ごとのチームで一丸となってムカデ競争やリレーなどの様々な競技やパフォーマンスで競い合い、大いに盛り上がりました。総合結果では全チームが接戦の中、芸術学部立体アート学科チームが優勝し、昨年に続いて2連覇を達成しま

した。表彰式後には参加者全員の中から、東京ディズニーランド1日パスポートや画材券などが当たる大抽選会があり、幸運な4名がパスポートを手に入れました。



NEWS ● 3 グリフィス大学クイーンズランド・カレッジ・オブ・アートとの学術交流協定締結

オーストラリア・ブリスベンにあるグリフィス大学との学術交流協定が2007年3月2日付に正式発効しました。文芸学部、教育学部、経営学部、法学部、工学IT学部、環境科学部などで構成される総合大学で、本学は芸術学部に対応するクイーンズランド・カレッジ・オブ・アート (QCA) との交流活動を推進していきます。

本協定により、本学の協定大学は5大学 (中国、イギリス、フィンランド、台湾、オーストラリア) となりました。

(国際センター)



<http://www.griffith.edu.au/>



Topics ● 6 オープンキャンパス2007

7月16日、オープンキャンパスが杉並・相模原、両キャンパスで開催されました。15日のオープンキャンパスは台風の影響でやむを得ず中止となりましたが、それでも受験生、地域住民の方々を合わせて1345名の参加がありました。学生ボラ

ンティアが自分たちの所属する学科、専攻、コースを案内するキャンパスツアーは在学生からの生の声が聞けるということで大好評の企画となりました。また、各学科の研究室が企画した毎年大人気の“ワークショップ”では訪れた参加者は女子美で体

感する「モノ作りの楽しさ」を満喫していたようです。台風の影響により中止となった15日。秋のオープンキャンパスと名前を変え9月23日に開催することが決定しております。企画などの詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。



Topics ● 7 日本映像学会全国大会の開催

女子美術大学では最初の開催となる日本映像学会第33回全国大会は、6月2日～4日、相模原キャンパスで開催されました。大会は、「映像」という共通の問題意識を大切にして、人間と社会の未来について自由な討論と闊達な研究の場を作り出すことを目的としています。本年は「進化する“映像”と“メディアアート”を捉える」をテーマとし、全国より参加した映像のプロフェッショナル、若い研究者、クリエイター、大学等教育関係者ととともに、女子美の学生たちも交えた大会となりました。大会の実施に当たっては、学校側の協力のもと、先生方、助手、学生たちの献身的な努力により、映像学会としては記録的な発表件数とともに、多くの参加者を数えることができました。[参加者数 合計398名]

特別講演では、マーク・ディッペ氏（映

画監督）、稲蔭正彦氏（慶應義塾大学教授）、ズビグニュー・リブチンスキー氏（本学芸術学部メディアアート学科客員教授）により、映像表現者に向けた示唆に富んだ講演が行われました。また、研究発表、作品発表では、映像に対するこれからの研究や創作活動に活力と刺激を与える活発な意見交流がなされました。併せて、企業の協賛を得て女子美アートミュージアム（JAM）において実施した新しい技術動向を実感する展示会にも、学会参加者とともに多くの見学者を迎えることができました。

全国から参加された方々の評価も高く、女子美を知っていただく良い機会となったことと思います。このような機会を通して、学際的な交流が活発になることを期待しております。

(大学院美術研究科教授 為ヶ谷秀一・大会実行委員長)



映像と音楽で表現されているイメージの温度を感じるディスプレイ
(Thermoesthesia・串山久美子氏[首都大学東京]作品)



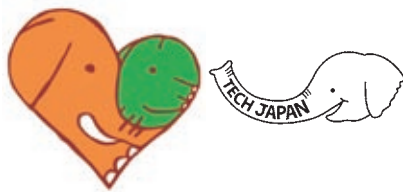
2日間にわたり、研究発表は41件、作品発表は28件。

Topics ● 8 「スリランカの像」 デザインコンテスト

スリランカは2004年の地震による大津波、また、内戦の被害により、多くの人々が苦しい生活を送っています。角地スベンドリニさんが代表を務めるNGO、TECH JAPANは、現地の女性たちに裁縫技術の指導等を行うことで自立できる生活へのバックアップを行っている団体で、今回、裁縫で制作する製品などに使用する象の親子のイラストと団体のロゴマークデザインの公募が行われました。女子美内外より応募総数57点が集まり、8月1日に杉並キャンパスにて公開審査会が行われました。審査員に、竹下景子さん（女優）、猿渡紀代子さん（横浜美術館首席学芸員）、ピーター・バラカン氏（音楽評論家）、角地スベンドリニさん（TECH JAPAN代表）、そして本学大学院教授、為ヶ谷秀一先生を迎え、厳選なる審査の上、最優秀賞、

各審査員賞が発表されました。最優秀賞・象の親子イラスト部門は短大造形学科デザインコース情報メディア2年・金田葵さん、ロゴマーク部門は短大造形学科デザインコース1年・村井麻子さんが受賞されました。デザインのできるボランティアとして、選ばれた作品たちがスリランカの働く女性たちのために役立ってくれることを期待しています。<http://www.techjapan.org/designcontest/award.html>

（短期大学部造形学科デザインコース講師 佐藤真澄）



受賞作品(左)金田葵さん (右)村井麻子さん



Topics ● 9 海外研究員 于理さんの留学生活

中国より本学へ研究員としていらしていた于理さんからのメッセージをご紹介します。

日本留学の感想

私は中国の広州美術学院から参りました。広州美術学院で准教授として、中国画の密画の画法、主に人物画を教えています。2007年3月からの半年間、女子美術大学の日本画専攻の研究員として、中国の密画の画法と現代日本画の技法の関連性及び日本画学科の教学について研究しました。

日本画と中国画は昔から深い関連があり、材料の使い方から美学の法則、乃至深い文化の重ねに至るまで、もはや同じ東洋文化といえます。今日において、それぞれが違った角度と程度で西洋文化の影響をうけており、各々が新たな状況を生んでおります。

日本画は画材の研究方法として、実験で出したデータを科学的に分析し、伝統的な材料の性能を徹底的に研究し、伝承しています。特に顔料についての研究は独特であり、日本画の表現力を広くしていると思います。新たな表現の可能性を感じ、前からは是非日本に来て、この目で見たいと思っていました。

女子美術大学がこの機会と研究環境を与えてくださったおかげで、私の願いは叶いました。そして女子美術大学の教学面はとても自由だと感じています。講義においても、基礎と技法を教える他、独特な“素材研究”

の授業が設置され、学術性もあり、面白さもあります。講評会、総合演習説明会なども教学研究としても勉強になりました。

研究期間で、私は古賀先生の“日本画材料技法演習”、馬場先生、広瀬先生の“紙漉き”、宍倉先生“絵画材料・技法演習”と橋本先生の“日本画顔料研究”についての授業を選びました。とても勉強になり、中国では失われつつある伝統技法を見つけることができ、大学時代に戻ったように感じました。また、余暇の時は人物画を制作することで、日本画の顔料の使い方が把握できました。橋本先生がおっしゃるように、顕微鏡で見ると、日本画の顔料は伝統中国の顔料の粒子以上の大きさであり、その粒子からは新たな角度でのインスピレーションが湧き、中国画の観念や技法を融合して実験的に楽しんで制作することができました。

日本画の現代顔料と技法は中国に伝えられ、中国の画家たちも日本の優秀な文化を共有でき、新たな挑戦をしています。私は日本でそれを実感でき、とても光栄です。先生方の関心と学生たちの親切な手助けに感謝しています。おかげで日本での研究期間、様々な日本文化に触れ合うことができ、女子美で勉強した日々は私のいい思い出になりました。



「暮色」 70×92cm 2007年



「湖」 46×38.5cm 2007年

NEWS ● ④ 林規章准教授、「One Show Design」 Goldを受賞



賞名 One Show Design Gold
作品名 「KIMONO」

本学デザイン学科准教授である林規章先生が One Show Design で Gold を受賞されました。受賞作品は女子美アートミュージアムで昨年開催した「KIMONO 小袖にみる華・デザインの世界」展の展覧会ポスターです。

One Show は、カンヌ国際広告賞、Clio Awards と並び三大広告賞のひとつとされています。デザインのもつ広告効果や役割が明確化する傾向を受け、One Show の1 カテゴリーから独立したのが One Show Design です。世界各国のデザイナーにより審査されており、2007年の応募数は48カ国より2088点ありました。受賞者数は Gold 21点、Silver 28点、Bronze 22点です。司賞を主催する The One Club は、1975年に設立され、ニューヨークを拠点に置く団体であり、授賞式はニューヨークで開催されました。林先生に受賞に対するコメントをいただきました。

「着物とKIMONO」

平面裁断である着物が、着衣した瞬間から豊かなドレープを生み出す。

ディテールの美しさはもちろんの事、2次元から3次元へと移行する美しい瞬間を、日本人は日常に見てきた。その DNA が脈々と流れている。

無駄を排し、細部に圧倒的な時間を費やす、これこそ「粋」というのか。

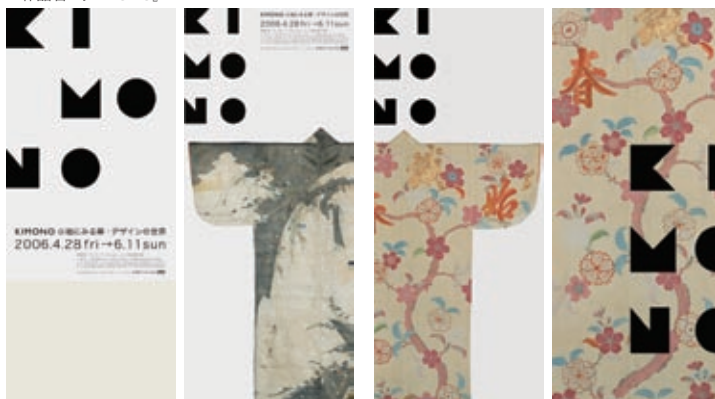
この「粋」という日本人特有の突き抜けた感覚が世界を魅了してきた。

One Show Design Gold を受賞した一連の作品群は、この DNA を最大限効果的に見える様に演出した。直線と円のみで構成される文字で「KIMONO」とタテに組み、一瞬塊感を想起させる。このアイコン的な見え方は、英文だが、日本のと言って良い。

いわゆる「家紋」や「屋号」など日本人が得意としてきた演出である。

世界の judge はこの考え方に賛同してくれたのだろうか。

チェルシー美術館を後に夜のマンハッタンに向かった。



Art Director: 林規章 Noriaki Hayashi・Creative Director: 奥村敦正 Yukimasa Okumura・Designer: 林規章 Noriaki Hayashi・CG: 吉川武志 Takeshi Yoshikawa/amana digital imaging solution・Client: 女子美アートミュージアム Joshibi Art Museum



林 規章

アートディレクター /
グラフィックデザイナー
HAYASHI DESIGN 主宰
女子美術大学芸術学部
デザイン学科 准教授
チェコ・プルノ国際グラフィック
ビエンナーレ入選、
広告電通賞、日本雑誌広告賞
賞、ニューヨーク ADC 特別賞、
JAGDA、The One Show
(ニューヨーク) Gold Award、
など受賞多数

受賞者に贈られるトロフィーは鉛筆の形をしており、「ペンシル」と呼ばれる。

Topics ● ⑩ 第一線のデザイナーから学ぶ集中講義

7月、デザイン学科2年生を対象に集中講義が開催されました。講師を勤めたのは株式会社ドラフトの柿木原政広氏、植原亮輔氏、プロダクトデザイナーの五十嵐久枝さん、Klein Dytham architecture (クライン・ダイサム アーキテクト) のアストリッド・クラインさんの4名で、ヴィジュアルデザイン、プロダクトデザイン、環境デザインの各

領域において、第一線で活躍されている方々です。3日間かけて行われたこの集中講義では、デザイナーとしての基本的なものの考え方やそのプロセス、素材の性質とそれを用いた制作の手法、それに立脚した思考方法とそのプロセスなど、示唆に富む内容のお話を伺うことができました。また、現役の方々ならではの体験談なども、学生にとっては得ると

ころが大きかったです。また、異なる領域で活躍する方々の講義を3日間連続して受講することは、デザインの各領域において何が共通しており、何がそうでないのかを目の当たりにする良い機会でもありました。次学年のコース分けをひかえた2年生にとっては、教わるころの大きな講義になったようです。



植原亮輔氏(右)、柿木原政広氏(左)



五十嵐久枝さん



アストリッド・クラインさん

J A M ●●● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

展覧会開催報告

「祭りの装束～林唯一の眼～」展



展覧会特別企画として6月23日に「林利根先生と楽しむ唯一のスケッチ」を実施しました。林利根名誉教授は林唯一氏の三男にあたり、展覧会の開催に際しては、唯一氏が愛用した絵具や手製のスケッチブック、日記帳などをご提供いただくとともに、調査にも多大なるご協力をいただきました。そして「展覧会ではケース内に展示されているが、本当は手に取って見てもらいたい」という利根先生のご希望から、展示されなかったスケッチブックを公開し、実際に手にとって鑑賞するという特別企画が実施されることとなりました。スケッチブックの数に応じて定員15名という少人数の企画でしたが、スケッチブックを1ページごとにじっくりと鑑賞したり、利根先生が語る林唯一氏の画家としての仕事ぶりや、父親としての思い出話にじっと聞き入る参加者の方々の熱心な姿が印象的でした。

(5月24日～7月23日)

オープンキャンパス企画報告

「電通×JAM×女子美生コラボレーション企画 ポスターにできること。」

電通で作られた人権啓発のためのスローガンから、女子美生がポスターを作るという今回のコラボレーション企画は、4・5月にJAMで開催した展覧会「ポスターにできること。～電通人権ポスターより～」をきっかけに生まれました。制作途中には、ラフスケッチを提出した学生に電通の方から制作についてのアドバイス、コメントをもらう機会もあり、最終的に作品として提出されたポスターの総数は杉並キャンパス17点、相模原キャンパス7点、計24点となりました。オープンキャンパス当日には、人権ポスターについての講演、ポスターを制作した学生本人によるプレゼンテーション、その作品に対する電通の方々の講評を公開形式で実施。実際に広告業界の一線で活躍されている方々から現場の話聞き、また自分の作品について講評してもらうという体験は、学生たちにとって良い刺激となったようです。

(7月16日オープンキャンパス〈相模原〉で実施)



展覧会予告

「Glass Session 2007ーガラス表現の模索と試行ー」

ガラス教育者ネットワーク（通称 GEN）では毎年ホスト校を決め、教員の情報交換のための会議、学生のためのワークショップなどのプログラムをおこない、交流をはかっています。本年は、女子美術大学芸術学部工芸学科ガラスコースがホスト校となり、女子美アートミュージアムでGENに所属する教育機関の学生によるガラス作品の展覧会を開催します。本展覧会には、14校の学校が参加します。今、まさに模索と試行の中で制作を行う学生たちの多彩なガラス表現をご覧ください。

(9月12日～10月19日)



「造形さがみ風っ子展」

相模原市教育委員会主催の市内小中学生の児童・生徒の作品展

(10月25日～10月29日)

「柳悦孝のしごとー民芸運動と女子美工芸草創期ー」

(11月9日～12月10日)

Topics ●●● アドバタイジング・スタディ・プログラム「EFA」

今年度、学生の就職支援の一環として、広告業界を目指す学生にプロのクリエイターが広告制作をレクチャーする「Advertising Study Program」を実施しています。学年・学科を問わず全女子美生を対象にしたプログラムで、低学年からプロの視点での物創りを学び、ビジネス感の育成、自己PR力の強化などを目的としています。

参加学生は、いくつかの段階を経て広告制作について実践的に学び、若手クリエイターの登竜門である朝日広告賞にチャレンジするという内容になっています。

短大生36名、大学生75名、大学院生3名、卒業生3名の計117名が参加。6月下旬にクリエイターミーティング（広告業界

についての特別講義）、9月上旬に夏休み中の課題作品のプレゼンテーションを実施。申し込み時に提出した自己PR作品と夏休みの課題作品、プレゼンテーションなどを総合的に判断し、10月初めに選抜メンバー10名を選出。選抜メンバーはクリエイターとのコラボレーションによる作品を制作し1月末に朝日広告賞へ応募します。



イターとのコラボレーションによる作品を制作し1月末に朝日広告賞へ応募します。

プログラム内容や経過報告など詳細はEFAスペシャルサイト (<http://efa.joshibi.net>) で。



Topics ● 12 公募展受賞者紹介

■ NTT ドコモ P903i/P904i カスタムジャケットデザインコンペ

【最優秀賞】

吉田あゆみ (芸術学部デザイン学科2年)

【優秀賞】

小山斐香 (芸術学部メディアアート学科3年)

三澤真梨 (芸術学部芸術学科3年)

■ HEARTLAND KARUIZAWA DRAWING BIENNALE 2007

【入選】

吉岡聖美 (大学院美術研究科修士課程デザイン専攻ヒーリングアート造形領域2年)

■ 世界らん展日本大賞2007

【美術・工芸部門 入選】

岡本典子 (芸術学部工芸学科染コース4年)

Series ● シリーズ 女子美探訪⑦ 女性差別について

卒業生で写真家の迫川尚子さんの撮る女子美のシリーズ第7回です。写真とエッセイをご紹介します。

差別は、よくないことですね。では、女性差別は、女性にとってどうよくないのでしょうか。不平等だから? 「不平等」って、「男と比べて」ということ? でも、差別はそういう比較の問題なのかな。ふと、そんなことを考えてしまっ。

例えば、状況にもよりますが、男は女ほどに愛想笑いを必要に迫られません。女はうっかり笑わないでいると、怪訝そうに見られることさえあります。「無愛想」「女のくせに」…だから、とりあえず笑っておけみたいな。女の知恵と言いますか、女は皆、多かれ少なかれ、笑顔のプロみたいなところがあります。なんで? と思いません? なんで女だから笑うの? と思うと、急に「ずるい」「ムカつく」といった言葉が沸き起こりますが、なんで? というのは、もっと素朴な疑問なんです。だって、私が女だろうが、種子島出身だろうが、カンケイないじゃないですか。笑うこととは。

私は、よく笑います。なんで笑うか? ほっといて下さい。もちろん、女の笑顔は、身に染みついたサービス精神のあらわれでもあるんですが、女というだけでサービスするのが当然という空気は、やはりどうかと思います。図にのられたりもしますし。当然というのもしゃくですが、俺に気があんなのか? なんてカンチガイは、ホント勘弁していただきたい。



そもそも、コックさんは四六時中コックさんでしょうか。仕事が終われば、帽子を脱ぎます。男を休む…時だってありません? 女も、四六時中女なわけじゃありません。女になったりならなかったり…それは時と場合によりますし、相手にもよりますし。そういう個々の事情や関係の機微にあまりに無頓着、あまりに無神経ですね、男と女の役割を(主と従みたい)に一方的に決めつけるのは、そう。差別は、よいも悪いも、ただ、無神経! と言えばすむ(はずの)ことなんです。厄介なのは、その決めつけが男だけでなく、女の方にもあるから。まだまだ、暗黙の了解として残っているからです。

迫川尚子 (さこかわ なおこ) 【写真家】

鹿児島県種子島生まれ
女子美術短期大学造形科 衣服デザイン教室卒業
「BEER & CAFE・BERG」副店長



05年出版されて高い評価を博している写真集「日計り」。帯には森山大道さんによる「寺山修司が新宿のネルソン・オルグレンならば迫川尚子は新宿のヴァージニア・ウルフである。」とのコメントが!

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎号無料でお送りしております。ご希望される場合は、お送り先を広報入試課まで連絡ください。
また、広報入試課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。
【広報入試課】 TEL. 042-778-6123
FAX. 042-778-6692
[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

発行 学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 企画部 広報入試課
監修 原田 松野
発行日 2007年9月20日